

『レフト・ビハインド』と千年期前再臨説と アメリカ保守派についての覚書

加藤 知子

はじめに

『レフト・ビハインド』は、預言研究家ティム・ラヘイの構想を基にジェリー・ジェンキンスが執筆したもので、キリスト教終末論の一つ、デイスペンセーション系千年期前再臨説をベースにした小説である。『レフト・ビハインド』は、1995年にアメリカで第一巻が発行された後、16巻が出版された。シリーズ全体での売り上げは6千5百万部を超えている¹⁾。小説は2000年に映画化され、こちらは第三作目までが制作されている。日本では劇場未公開であり、DVD販売のみとなっている。

本小論では、第一章で、*Left Behind — World at War* 『人間消失 ファイナル・ウォー』(映画第三作目、以下『レフト・ビハインド』DVD第三巻と呼ぶ)に見られる〈アメリカ保守なるもの〉に言及しつつ、同作品が千年期前再臨説をベースとしながらも、アメリカこそメシア的役割を担うべきだとするアメリカ保守派層の世界観を代弁するとともに、そのような世界観を人々の中に一層湧きたてる映画であると指摘する。第二章では、ノーマン・コーン『千年王国の追求』に詳述されている、階級闘争やヨーロッパに古くより伝わる黄金時代への懐古と結びつくなど、大衆化した千年期前再臨説について簡単にまとめ、続く第三章では、その中の一つ〈革命的〉千年期前再臨説の、〈虐げる者対虐げられる者〉といった構図が新たな形で立ち現れているのが見えるのは、〈抑圧者対被抑圧者〉という階級闘争の形を取る、所謂リベラル派と呼ばれる人々の

中に見られる神学であって、我こそが社会を浄化する役割を担うのだと考える点では、保守派もこれらリベラル派の人々も同じ地平線上にあると論じる。最後に、アメリカには世界の新秩序のために自ら特別な役割を演じようとする傾向が強いが、それを相対化するには、キリスト教のエッセンシャルな部分を保つという意味での原理主義を破棄するよう促すのではなく、むしろ、そのようなエッセンシャルな部分を確認し、それ以外の要素を剥がしていく作業が必要なのではないかと論じ、本小論の結論としたい。

第一章 『レフト・ビハインド』 DVD 第三巻に見られるアメリカ保守なるもの

『レフト・ビハインド』 DVD 第三巻のあらすじは以下のとおりである。

聖書で預言されていた携挙けいきよが起こり、生まれ変わったキリスト者ボーンアゲインたちが天に上げられて後、世界を動かすようになったのは、国際連合事務総長のニコライ・カルパチアであった。彼は平和主義を掲げるが、実は反キリストである。携挙の後に福音主義キリスト教信仰に目覚めた人々は、カルパチアらの弾圧の下、密かに信仰を保っていた。主人公のキャメロン・ウィリアムズ（愛称バック）は、レイフォード・スティールの娘、クローイと結婚し、また、レイフォードもアマンダという女性と再婚する。彼らは厳しい中で信仰を守り、伝道が続けることを決意する。彼らの霊的指導者である牧師ブルースの指揮下、クローイをはじめとするキリスト者同志は、カルパチア率いる世界共同体グローバルコミュニティが隠し持っている聖書を奪回した。それらの聖書は伝道のために用いられたが、それらにはキリスト者を滅ぼすためにカルパチアによってあらかじめ毒が吹き付けられていた。この毒は、カルパチアが世界各国から科学者を集めて開発した生物兵器である。聖書に触れた人々は次々と病に倒れ、牧師ブルースも病のために命を落とした。レイフォードが回心する前に惹かれていた女性ハティーは、カルパチアの子供を身ごもる。レイフォードとアマンダはハティーにカルパチアの元

から逃げるように勧めるが、ハティーは拒否する。

一方、アメリカ合衆国フィッツヒュー大統領はカルパチアの軍備放棄の提案に同意し、自国を武装解除してしまう。しかしながら、副大統領は密かに国民軍を地下組織として配備した。副大統領は、自分はアメリカを護るために働いており、カルパチアがアメリカを攻撃する計画を立てていると大統領に告げた後、カルパチアの計略により命を落とす。フィッツヒュー大統領も狙われたが、九死に一生を得る。その後、国民軍の一人であって、諜報活動をしているキャロリン・ミラーや、バックたちとの交わりの中で、大統領はカルパチアの正体と企みを理解する。カルパチアは国民軍の仕業と見せかけ、大量破壊兵器を用いてアメリカをはじめ世界各地で攻撃を始める。フィッツヒュー大統領は、イギリス首相やエジプト大統領らと共に、カルパチアに対して先制攻撃を仕掛けようとしたのだが、結局は裏をかかれた形となった。

イエス・キリストによる贖罪を受け入れ、生まれ変わった^{ホーリー}キリスト者となった大統領は、自分は反キリストを殺すことはできないが一反キリストを倒すことができるのはイエス・キリストだけなので一カルパチアの動きを妨害することはできると言い、ただ一人カルパチアの司令塔へと向う。司令塔は破壊され、大統領は死亡するが、カルパチアは死ぬことはなく、彼が瓦礫の中から傷一つ負わないで立ち現れる場面で映画は終了する。

千年期前再臨説によれば、終わりの時が近づくと、真のキリスト者は天に上げられ（携挙）、その後、大患難の時代が続く。反キリストに従わない者は容赦なく殺され、また、天変地異や病、戦争が人類を襲う。しかしながらついにイエス・キリストが再臨し、この地上に至福千年が始まるという。『レフト・ビハインド』はこの千年期前再臨説を縦糸としているが、一方、アメリカ的なるもの、特に保守派層に強く見られる価値観を横糸として物語が織り上げられていくため、我々は全体としてそこに、所謂千年期前再臨説そのものとは異なった基調を見ることになる。

例えば、『レフト・ビハインド』DVD 第三巻では、元国連事務総長で、現在グローバルコミュニティは世界共同体のリーダー、ニコライ・カルパチアは、一見平和主義者に見えるが実は独裁者であって、アメリカ合衆国を攻撃しようとしているのだと、アメリカ副大統領がフィッツヒュー大統領に告げるシーンがあるが、これは、アメリカ合衆国保守派層に根強くある国連に対する不信²⁾を想起させる。また、アグローバルコミュニティメリカ国民軍は世界共同体に抵抗するのだが、この設定は、民兵組織ミリシアや全米ライフル協会の、自分の土地・家族・財産は自分で守る、政府は口を出すなという考え方が、国際レベルでは、アメリカの土地・家族・財産はアメリカが守る、国連は口を出すなというようになるのとパラレルである³⁾。

また、同 DVD で見逃せないのが、フィッツヒュー大統領とカルパチアとの決戦である。大統領がカルパチアと対峙するシーンは二箇所あるが、それぞれの場面が、アメリカ大統領には、神の護りがあることを示唆する仕上がりとなっている。最初に大統領がカルパチアと対決する段階では、まだキリスト者として生まれ変わっていないので、カルパチアにしてやられてしまう。そして、カルパチアの超人的な力により、大統領はカルパチアの司令塔の窓から何十メートルも下へ投げ出される。しかしながら大統領は死ぬことなく、その場を立ち去る。そのため、カルパチアをして、あれは人のなせる業ではないと言わしめた。その後大統領はイエス・キリストを心の中に受け入れ、ボーンアゲイメント生まれ変わったキリスト者として再びカルパチアのもとへ赴く。彼は一人で乗り込むのだが、司令塔を警護する警備員たちには、彼の姿が見えない。モニター画面にも彼の姿は映らず、エレベーター前の二人の警備員の間を通り抜け、カルパチアの司令室まで到着する。このシーンは、『聖書』使徒言行録第 12 章 6 節から 11 節までを連想させる。同箇所では、牢に鎖でつながれ、二人の兵士たちの間で眠っていたペテロが、天使の導きのもと、誰にも気づかれないまま逃げ出すことができたエピソードが記されている。ペテロはキリストが天に上げられた後、福音を述べ伝える特別な役割を与えられた使徒の一人であり、『レフト・ビハインド』DVD 第三巻では、そのペテロ

と重なり合うイメージをアメリカ大統領に与えているのである。アメリカこそが世界をリードするという価値観は、アメリカのネオ・コンサーバティブたちに強く見られるものであって、その大義名分でもある正義や文明を広めると言った使命感が「宗教的用語や概念によって表現されているところがアメリカの特徴」⁴⁾なのであるが、『レフト・ビハインド』DVD 第三巻に映し出されたフィッツヒュー大統領は、このアメリカ的な特徴を存分に体現していると言えよう。

実は、『レフト・ビハインド』映画第三作目は、小説の第三巻『ニコライ』を元にしたのではなく、どちらかという小説第二作目『トリビュレーション・フォース』の最後の箇所を大きく引き伸ばしたものに近い。しかしながら、同作品は、小説をベースにしているというよりは、映画そのものがオリジナルの作品であると言ったほうがよい。バックとクロイ、レイフォードとアマダの結婚、ハティーの妊娠といったエピソードは、小説第二巻にも含まれているが、それ以外は映画の中だけに見られるエピソードである。小説の中でもブルースは死んでしまうのだが、聖書に吹き付けられた毒によってではなく、海外で感染したウイルスによってである。もともと小説には、聖書を奪回する場面は含まれていない（よって、聖書が生物兵器に汚染されることもない）。アメリカ副大統領がフィッツヒュー大統領に、自分はアメリカのために働いているなどと告げる場面もない。小説二作目の第18章と19章で、大統領が国民軍と共に世界共同体グローバルコミュニティに対して攻撃をすることを計画しており、バックに、アメリカ東岸主要都市には近づかないように警告する場面がある。計画は実行され、すぐさま世界共同体が報復活動に出る。しかしながら、大統領が生まれ変わったキリスト者ポーンアゲイソンとなったり、カルパチアと一対一で対決したりする場面は小説には含まれていない。ところが映画では、大統領の回心と両者の対決が作品のクライマックスとなっており、そのため、アメリカのために国民軍を配備した副大統領の配慮や、彼そして後にはフィッツヒュー大統領も見せる元国際連合事務総長のカルパチアに対する不信感と相まって、映画全体として、

至福千年に至るまでの道筋の中でアメリカが大きな役割を果たし得るといったメッセージを聴衆に向けて発信する構成となっている。しかも、フィッツヒュー大統領には、神の靈的な護りがあるという設定により、アメリカが果たす役割に聖なる趣が更に付け加わるのである。小説の第二巻は1996年に発行されたが、映画は2005年の制作である。2001年9月11日の世界貿易センター攻撃、2003年3月以降の対イラク戦争という政治的・精神的・宗教的荒波の中にあるアメリカで、この映画はどのような意図を以て制作され、また、どのように聴衆に受け入れられたのであろうか。千年期前再臨説は元来キリスト教徒の間で長らく受け継がれてきたものであって、アメリカのファンダメンタルな一聖書の言葉に忠実なという意味での一信仰を持つキリスト者たちに広く支持されているのは事実であるが、同説を信じているキリスト教徒はアメリカ人だけではないし、また、アメリカの保守派層の全てがこの説を信奉しているとは限らない。しかしながら、『レフト・ビハインド』DVD第三巻には、千年期前再臨説だけでなく、保守派に強く見られるアメリカ的なもの、すなわち、国際連合への不信感、アメリカこそが世界をリードするという姿勢、ミリシアや全米ライフル協会の人々が共鳴するであろう価値観などが盛り込まれているため、保守派全体にアピールし得る作品となっている⁵⁾。言い換えれば、同作品は、千年期前再臨説をベースにしているとはいえ、それとアメリカ的保守主義なるものが混合体を成しており、よって、この映画で映し出されているものは、千年期前再臨説そのもの⁶⁾ではなく、神学の手を離れ、アメリカ的バイアスのかかった、言うならば大衆化されたそれであると言える。

しかし、千年期前再臨説の大衆化と、元来千年期前再臨説とは関係のない事柄の混入は今に始まったことではなく、古くから見られた現象である。次章では、ノーマン・コーン『千年王国の追求』に描かれている、中世ヨーロッパに見られた大衆化した千年王国運動について簡単にまとめてみたい。

第二章 大衆化する千年期前再臨説

ノーマン・コーンは、その著『千年王国の追求』で、千年期前再臨説がどのように生まれ、大衆化し、革命の色合いを帯びて行ったかを詳述している。

N・コーンによれば、最も古い黙示的文書、ダニエル書に示されるような、いつの日か全知全能のヤハウェ神が選民ユダヤ人に完全なる勝利をもたらすであろうというユダヤ教の信仰は、キリスト教徒たちに受け継がれていったのだが、メシア思想が、ユダヤ人たちの中に生き生きとした形で残っていた時代において既に、宗教上のプロフェッショナルともいえる預言者たちと一般民衆との間では、救い主が誰なのかについては理解の違いがあったという。すなわち、「預言者たちにとっては通常、終末のときに選ばれた民の上に君臨するはずの救い主はヤハウェ自身であると考えられたのに比し、一般民衆の信仰では、国が政治的衰退期に入ってから未来の〈メシア〉像が少なからぬ役割を果たした」ようであって⁷⁾、「バルクやエズラの黙示文書は、主要な部分は紀元一世紀のものであるが、そこに登場する超人の人物はまぎれもなく人間であり、不思議な超自然力を備えた武人の王である」⁸⁾というわけである。

キリスト教にメシア思想が受け継がれてからも、キリストと人間のイメージがオーバーラップし、キリスト教がローマ帝国から信仰を認められ、両者の関係が深まると、キリスト教系の諸神託は、「ローマ皇帝像に終末論的意義を与え続け」⁹⁾ることとなった。民衆の中には、具体的な人としてのメシア像が受け入れられる土壌が出来上がり、そこで、霊的な指導者としてだけではなく、「神の靈感を受けた預言者、メシア、神の化身とまで称する」¹⁰⁾ 説教師たちが数多く登場し、我こそは終わりの時に現れる最後の皇帝であるなどと称し、民衆を率いてコミュニオンを形成、既成の勢力（裕福な特権階級の人々）に戦いを挑むことが繰り返し起こった。

N・コーンは、『千年王国の追求』で、そのような自称メシア（あるいは、メシアの先駆け、または、特別な預言者）らによる千年王国運動を数多く紹介

しているが、それらに関わった人々には共通点が見られる。それらは次のようにまとめられる。

- ①中心的人物が、自らメシア、メシアとイメージがだぶる最後の皇帝、メシアの先駆けや特別な使命を帯びた預言者だ、などと称する、あるいは、自由心霊派に見られるように¹¹⁾、自分をキリスト教の神よりも上位に置くなどの自己神格化を図った。
- ②自分たちこそが真のキリスト教会であり、その神性ゆえに強盗や強奪、虐殺や強姦などが赦される、あるいは、神聖化されると考えた¹²⁾。
- ③終わりの時を具体的に明示した。例えば、ロクテアードのヨハネは、1367年までに苦難は終わり、シャルルマーニュ大帝の末裔であるフランス王がローマ皇帝になり、一千年続く平和の御世を打ち立てると預言した¹³⁾。
- ④キリスト教以外の伝統と交じり合うことにより、真偽顛倒たる様相を帯びるに至った。例えばナショナリズムや民族主義のイデオロギーと化したり、あるいは、汎神論との合体により、自ら神性を獲得したと主張した人々が、自分たちのその神性ゆえ、道徳律不要論者に墮したり（アモリ派異端¹⁴⁾）、自由心霊派たちのように「全面的没倫理主義」¹⁵⁾に陥ったりし、更には、ギリシャ・ローマ時代より伝わる自然状態への邂逅を千年期前再臨説と混ぜ合わせることにより、私有財産（配偶者も含む）の否定を導き、そこから「革命的神話となる一つの教理を生み出した」¹⁶⁾りした。

いずれも、カトリック教会が永らく採用してきたアウグスティヌスによる終末観とは異なり、また、聖書の記述とは相容れない立場であって、たとえ彼らがキリスト者を自認したり、聖書に基づいた運動を行っているとは主張したとしても、結局は聖俗を問わず取締りの対象となった。

マタイによる福音書第24章には、イエス・キリスト自身の言葉として、終末についての記述がある。それによれば、多くの自称キリストやにせ預言者が出現するが、彼らを信じてはならず、また、終わりの時は、ただ父なる神のみが

知っているということになっている。従って、我こそはメシアだとか、預言者だなどと言う者、あるいは、終わりの時を具体的に明言する者は、聖書に反する行為を犯していることになる。また、強盗、強奪、虐殺や強姦、そして、道徳律不要論や全面的没倫理主義などは、端的に十戒に反している。私有財産については、確かに、ルカによる福音書第 18 章に登場する資産のある青年に、イエス・キリストが、「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい」（ルカによる福音書第 18 章 22 節）と述べたり、使徒言行録第 4 章 32 節の「一人として持ち物を自分のものと言う者はなく、すべてを共有していた」というような箇所がある一方で、ルカによる福音書第 19 章に出てくる取税人のザアカイが自分の財産の半分を貧民に施しますと言った時、イエス・キリストは、いや、全部施さなければならないと非難するのではなく、「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」（ルカによる福音書第 19 章第 9 節）と述べており、極端な富の集中や弱者虐待を戒める一方で、聖書が必ずしも私有財産を全面的に否定しているわけではないことがわかる。

『レフト・ビハインド』DVD 第三巻では、反キリストに対して戦いを続けるキリスト者たちの戦闘グループ、トリビューション・フォースは存在するが、その基本的な役割はキリストの福音を述べ伝えることであって、反キリストであるカルパチアと武力で争うことではない。また、彼らは、自分たちこそが至福千年を打ち建てるのだと自負することもない。反キリストを人力で倒すことはできず、それが可能なのは、終わりの時に再臨するイエス・キリストのみであるという路線を貫いている。実際カルパチアは、銃弾を打ち込まれても、自分の司令塔もろともロケットで破壊されても、死ぬことはない。キリスト者による強奪、虐殺や強姦は行われず、終わりの時を年月日で具体的に示すことも避けられている。更に、トリビューション・フォースのメンバーらによる私有財産（配偶者も含む）の否定や道徳律不要論、全面的没倫理主義などといった点は見られない。これらを見る限りでは、『レフト・ビハインド』DVD 第三

巻は、基本的には聖書に忠実であろうとする千年期前再臨説をベースにしているとひとまずは言えるかもしれない。

しかしながら、前章でも言及したように、同作品の横糸には、アメリカ的なものが織り込まれており、そのため全体としては、千年期前再臨説だけに終始するに留まらない作品となっている。また、多少穿った見方になるかもしれないが、N・コーン『千年王国の追求』の中に紹介されている、中世ヨーロッパに繰り返し登場した、大衆版千年王国運動との共通点と同作品中に含まれていると敢えて主張することも不可能ではない。

まず、トリビュレーション・フォースの主な働きは、一人でも多くの人々にキリストの福音を伝えることであるとされるが、そのために聖書を^{グローバルコミュニティ}世界共同体より奪い、トラックに積み込んで逃げ去るシーンが映し出される。切羽詰った行動とはいえ、これは盗みの一種であると言えないわけではなかろう。また、物語が展開する時代の設定が現代であって、かつ、反キリストが国際連合事務総長であることになっているため、具体的な年月日こそ明示されていないが、あたかも今こそが大患難の始まりであると示唆しているかの印象を与える。

そして何よりも、アメリカ大統領に、使徒ペテロと重なり合うようなイメージを与え、アメリカを聖視することにより、アメリカのメシア的役割をほのめかす効果を出している点が指摘されなければならないだろう。この〈アメリカ＝メシア〉という構図は、米国の視聴者をして、アメリカこそ世界のリーダーなのだ、というナショナリズムを想起せしめ、国威発揚の効果があると言える。セバスチャン・ファト (Sébastien Fath) は、『*Dieu Bénisse L'Amérique* (『神よ、アメリカを祝福したまえ』) の中でアメリカこそがメシアの役割を果たし、〈アメリカのやり方〉を世界に伝道することを使命とするブッシュ政権のスタンスを新メシア思想 (néomessianisme) と称しているが¹⁷⁾、『レフト・ビハインド』DVD 第三巻は、ブッシュ政権がリードする現在のアメリカ合衆国の、特に保守派層を映し出す鏡の役割を果たしていると同時に、彼らの中のナショナリズム

を一層沸きたてる作品であると言えるかもしれない。

しかしながらこのような千年期前再臨説と結びついたナショナリズムは、過去に何度も立ち現れているものであって、アメリカにおいて初めて観察されるものではない。再びN・コーン『千年王国の追求』によれば、フランス王が終わりの日の皇帝として君臨する¹⁸⁾、あるいは、ドイツ皇帝フレデリックのもとに世界が従属する時、キリストの再臨と最後の審判が訪れる¹⁹⁾といった信仰が中世ヨーロッパに見られたという。それぞれ、フランスあるいはドイツが新世界のリーダーであるという構図である。

このように、千年期前再臨説は、他の思想や伝統との混合により、ナショナリズム、そしてそこから導き出される排他性、また、メシア的役割を担っているという自負心より沸き起こる帝国主義的傾向といった、負の可能性を抱えるものであると言える。『レフト・ビハインド』DVD第3巻は、2005年に映画化されたものを収録したものであり、対イラク戦争開始から2年後、ストーリーの展開からして、その目的は、ますますの国威発揚ではないかと揶揄されても仕方がない側面を持っていると言えよう。

しかしながら、一見奇妙なことであるが、千年期前再臨説が、ナショナリズムといった、所謂保守派の中に見られる傾向と親和性がある一方で、同説は階級闘争へとも発展する可能性があるという点で、一般に左派と言われる人びとの中にも共鳴者を見出すのである。次章では、N・コーン『千年王国の追求』を引き続き手がかりに、ヨーロッパにおいて階級闘争という形で現れた千年期前再臨説について簡潔にまとめ、その〈革命・社会改革〉というシナリオが再び立ち現れたのは、リベラルなキリスト者たちが信奉する諸神学である点を指摘したい。

第三章 革命家となる「キリスト者」たち

『千年王国の追求』によれば、〈太古の昔は皆平等で抑圧などはなく、平和の黄金時代であったが、その後、人びとの間に階級ができ、労働が強いられ、

暴力がはびこるようになってしまった>とする考え方がギリシャ・ローマ時代から存在し²⁰⁾、それが民衆の終末論的幻想と結びつくことにより、そのかつての輝かしい<自然状態>が未来へと映し出されるようになった、という経緯がヨーロッパにはあるという。すなわち、かつての皆平等で平和な輝かしい黄金時代は損なわれ、今や支配する者・される者、管理する者・される者、搾取る者・される者、富める者・貧しい者といった分け隔てができてしまった、しかしながら、虐げられた者が虐げる者を打ち破るとき、そこに新たな未来が開け、至福千年が開始せらるる、という考え方である。

この<虐げる者>ならびに<虐げられた者>は、誰がメシア的役割を担うのかによって変わる。例えば、チェコ人にとっては、彼らが<虐げられた者>、ドイツ人らが<虐げる者>であって、後者のせいで、かつてのチェコの黄金時代は損なわれてしまったと考える。しかし、<虐げられた者=チェコ人>が<虐げる者=ドイツ人>を打ち倒すならば、そこに、至福の時が回復されるという。一方、ドイツ人の中には、自分たちが<虐げられた者>であって、彼らはローマ人という<虐げる者>の邪悪な扱いのもとに置かれているが、ドイツ人がローマ人を打ち破ることによりそこに黄金時代が回復される、という考え方があった²¹⁾。

このような、「過去の歴史の淵から平等主義的<自然状態>なる観念を呼び出してきて、それを未来の映写幕に投影しよう」と²²⁾いう試みが、「貧しい不穏分子に示されて、民衆の終末幻想と融合するとたちまち、革命的神話となる一つの教理」²³⁾が生み出された例として、N・コーン『千年王国の追求』第11章・12章・13章では、次のような事例が紹介されている。

14世紀のイギリス農民一揆²⁴⁾、フス派運動の過激派から生まれたタボル派の動き²⁵⁾、タボル派から分派した、自由恋愛を主張するボヘミア・アダム派²⁶⁾、15世紀にニクラスハウゼンの鼓手と言われたハンス・ベームによる民衆十字軍²⁷⁾や<ブントシュー>²⁸⁾の運動、16世紀になってからのトーマス・ミュンツァーによる<選ばれた者の会>が起こした反乱²⁹⁾、そして、ヤン・ポッケル

ソンらに率いられたアナバプティストたちによる新エルサレム建設の試み³⁰⁾などである。

このような階級闘争という形での千年期前再臨説の名残は、近代になっても消滅してしまうことはなく、マルクス主義という形でその姿を再び現した³¹⁾。マルクス主義では、太古の、平等で万物共有の至福状態が損なわれ、支配する者・される者という階級が出現したが、その階級間の闘争が終わり矛盾が解決されるとき、再び至福の状態が取り戻されるであろうとする。マルクス主義には宗教的用語は見られないが、歴史の展開を三段階に分けて見る—マルクスの場合、至福の時代・その喪失・その回復であるが—という点に、12世紀に生きたフィオレのヨアキムによる「歴史を三つの連続的時代の上昇過程として捉え」³²⁾る聖書釈義の影響が見られると同時に、やはりその釈義が取り込まれた中世ヨーロッパにおける革命的千年王国運動との連続性が見て取れる。ここにおいて、千年期前再臨説大衆化の歴史を頭石として、右からはナショナリズムの伝統を、左からは階級闘争という革命の伝統を積み上げることにより、一つのアーチが形成されるのを我々は見ることができると言えよう。

マルクス主義では、階級闘争がキリスト教的装いなしで外面に出ているが、この<階級闘争に勝利することにより新たな局面を開く>という考え方は、所謂リベラル派と言われるキリスト者の中に、新たなキリスト教的衣ころもを纏って立ち現れることとなる³³⁾。すなわち、20世紀に登場し発展を見た諸神学—解放の神学・黒人神学・フェミニスト神学・エコロジー神学—を担う人々の中に、である。

宮平望は、『現代アメリカ神学思想』の中で、解放の神学・黒人神学・フェミニスト神学・エコロジー神学に見られる共通点を端的に次のようにまとめている。

解放の神学、黒人神学、フェミニスト神学、エコロジー神学は、すべて広義の解放の神学として位置づけることができる。解放の神学は、言わば「非人間的に扱われてきた人々」の解放を、黒人神学は「非白人である黒人」の

解放を、フェミニスト神学は、「男性の抑圧下に置かれてきた女性」の解放を、エコロジー神学は「人間の支配下に置かれた自然」の解放を模索している。

宮平望『現代アメリカ神学思想』p.13 ll.18 - 23

ここには正に、〈虐げる者〉対〈虐げられた者〉の間の垣根が取り払われる時この世には至福の時が訪れる、という構図が見て取れはしまいか。この際、対立の解消といった社会改革の輝かしい役割を担うのは〈虐げられた者〉たち（あるいは、彼らに共鳴する人々）である。もしここに終末論的な色合いをつけたならば、これは、中世ヨーロッパで繰り返し立ち現れた革命的千年王国運動と基本的には変わらないものとなる。

20世紀において、これら社会改革的な神学を唱える神学者が現れてきた経緯としては、アメリカその他の地域に存在する根強い差別が挙げられよう。その中で苦闘を繰り返してきた人々が自らを解放せんと、これら神学の枠組みの中で勝利を目指して進もうとするその姿には、感動を覚えるものである。しかしながら一方でこのような階級の対立を乗り越えることをその中心課題として築き上げられた神学には、成功を収める可能性が果たしてあるのかと思わせるエピソードも報告されている。

例えば、南アメリカの貧者の側に立たんがために構築されてきた解放の神学であるが、「大挙してそのような貧者のもとへ赴くのは[解放の神学運動ではなく]ペンテコステ派教会なのである。ペンテコステ運動とともに、われわれは『貧者に対して心を動かすこと』から『貧者の心を動かすこと』へと移行する」のであるという指摘である³⁴⁾。

黒人神学については、第一人者である黒人神学者ジェームズ・コーンが、白人神学者のニーバーやティリッヒが住んでいたユニオン神学校（Union Theological Seminary in New York City）の広いアパートに住んでいたという古屋安雄による指摘がある³⁵⁾。黒人神学は、黒人対白人という構図における、

差別された黒人の視線からの神学である。しかしながら、J・コーン自身は権威あるユニオンにて仕事を得た後、快適な環境で生活を送っていた。彼が黒人であるからといって、そのような生活を送ってはならないということにはならないが、仕事を得た後も、虐げられていると黒人神学が主張する人々の間に取って住み続けるという選択も、彼にはできたはずである。また同著 p.146 には、栗林輝夫『現代神学の最前線―「バルト以後」の半世紀を読む』を引用しながら、配偶者が白人であったために、J・コーンから博士論文の審査を拒否されたというエピソードも紹介されている。

フェミニスト神学に関しても、再び古屋安雄『キリスト教国アメリカ再訪』p.152 ll.4 - 6 に、ユニオンでの朝の礼拝で、「ある女子学生が、これまでの神学はみな男性神学であったと言って、皆の前でアウグスティヌス、トマス、ルター、カルヴァン、バルト、ティリッヒ、ニーバーの主著に火をつけて燃やした」という出来事が紹介されている。

解放の神学・黒人神学・フェミニスト神学に携わる全ての人々がこのような狭隘とも見える振る舞いをするわけではない（古屋安雄もこの点については強調している）であろうが、これらのエピソードは、千年王国運動を軸として革命的闘いを展開した者たちが何世紀も前から既に示してきた挙動を連想させる。

例えば、16世紀にミュンスターにて、国家権力と既成の秩序に対して敵対していたアナバプティストたちを結集させ、戦闘的運動を展開したヤン・ポッケルソン（ライデンのヨハネ）は自ら王と称して君臨し、「豪華な衣装を身にまとい、町で最高の工匠の手で貴金属を材料にして造られた指輪や鎖や拍車を身に着けていた」³⁶⁾し、ポッケルソンらに共鳴したアナバプティストたちは、学問のない自分たちこそが、選民であると信じていたため、「彼らが大聖堂から略奪するとき、その古い図書室の書物や写本類を汚したり、引き裂いたり、焼いたりすることに異常な喜びをおぼえていた」³⁷⁾という。

ここには、ある神学なり教理なりが出来上る際、そこに本来聖書的ではない

要素が付け加わって形成される場合の限界が示されていると言えないだろうか。革命的千年期前再臨説では、〈虐げられた者〉こそが聖なる者であって、彼らがこの世を浄化すると考えた。しかしながら、聖書は、「正しい者はいない。一人もいない」³⁸⁾と明言している。この世には確かに、〈虐げる者〉と〈虐げられた者〉がおり、そこから数々の問題が出てきていることは事実である。そして、多くの場合、被害者は後者であることが多い。だからといって、彼らを聖人視してしまうことに過去の革命的千年王国運動の根本的な誤りがあったのではないだろうか。〈虐げられた者〉を解放するために現代にその確立を見た広い意味での解放の神学には、同じく〈革命・社会改革〉という車軸が備わっているのであるが、それら神学に携わっている人々には、そのような過ちを冒す危険性はないと断言できるだろうか。

どのような被害者でも、嘘をついたことのない者はいないであろう。姦淫を犯した者（実際に行爲に及ぶ、あるいは、卑猥な言葉を吐いたり、または、心の中で欲情に浸ったりなど）もいるであろう。父母を呪ったり、他人のものを欲したり、実際に盗みをはたらいた者もあることだろう。人生に打ちひしがれた彼らの状況を考えるならば、そのような言動に走ったとしても人間の目線から見れば同情の余地もあるであろう。しかしながら、神のスタンダードから見れば、それらはやはり罪であって、被害者とはいえ、善人、ましてや聖人などとは言えないはずである。実際、一旦権力や豊かな暮らしを手にしてしまうと、それを分かち合うことなく私物化し、今度は、自らが虐げる側にまわる人々がいるという事実は、虐げられている者の中にもある罪が具体化したことの現われではないだろうか。

しかしながらこのことは、所謂正統なる神学を奉じる者が聖人なのだとか、一般に社会的に高い階級にいる者は聖性も高いということの意味するのではない。聖書によれば、社会的身分の高低、性別、年齢、人種、信条、行い如何に拘らず、全知全能の神の基準に照らし合わせれば、「正しい者はいない。一人

もない」³⁹⁾、だから、真のメシアであるイエス・キリストの贖罪が必要なのだ、という自覚が、キリスト教の説く救いへの第一歩であるはずだからである。リベラル派と言われるグループに属する神学者の何人かの中に見られる、虐げられている側こそが社会を浄化するのだという考え方もまた、自らを神の位置、あるいは、それに近い場所に引き上げている（真に社会を浄化できるのは、イエス・キリストのみであるのに、自分こそが社会を浄化する、または、それに特別な立場で参画できると自負することは、自分を神あるいは神に近い存在として認めているということにならないか）という点では、『レフト・ビハインド』DVD 第三巻に見られるようなアメリカにメシア的役割を担わせる（担わせているかの印象を与える）傾向と大差はなく、よって、もしも後者がナショナリズムや帝国主義へと道を開く可能性があるのであれば、それは前者にもあてはまると言うべきだろう。実際、フス派運動の過激派から生まれたタボル派は、プロレタリアートたちが権力者に向かって立ち向かい、平等な共産主義的社会を実現するという点で革命的であると同時に国民的意識を帯びており⁴⁰⁾、今日、所謂右派ならびに左派と言われている人々に見られる信条が同時に見られた。

結論：＜アメリカ＝メシア＞という構図からの脱却は可能か

関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『アメリカの戦争と宗教』の中で、藤井創は、現在のアメリカに支配的な神観（福音主義や原理主義はもちろん、主流派教会のそれも含む）を相対化することができるものとして、絶対平和神学、反グローバリゼーションの神学、有色人種の視点・経験からの神学、貧しい人々の視点・経験からの神学、フェミニスト神学、Queer 神学（セクシュアル・マイノリティに対する差別に抗する立場の神学）を挙げているが⁴¹⁾、そのような相対化の試みが成功する可能性はどれほどのものであるのだろうか。これらは、しばしば所謂リベラルな人々によって推進される神学であるが、通常保守派と呼ばれる人々が、このような神学に触れてみようとすることはまず

ないであろうし、仮にそれらに触れたとしても、そのことにより、自らの信仰を客観的に見つめることは、あるのだろうか。

アメリカのカルバリー・チャペル牧師であり、イエス革命の第一人者である福音主義者チャック・スミスは、『黙示録の封印を解く』の中で、ヨハネの黙示録の中に現れる淫婦は、「教会に入り込んだ混乱と無秩序を表して」⁴²⁾ いるとし、彼としては、具体的には、その教会とは、秘蹟や聖人崇敬などを取り入れてしまったカトリック教会ならびに、今日「日曜日の礼拝においてキリストの名前が全く聞かれない」⁴³⁾ プロテスタントの一部の宗派（つまり、リベラル派のいくつかの教会）のことであると述べている。自分はキリスト教福音主義に堅く立つと信じる人々が、バビロンの大淫婦と映るリベラル派教会の人々の語る神学に、耳を傾けることはおそらくないのではと思われる。

キリスト教福音主義を堅持するキリスト者であっても、アメリカという文化の枠組みにいるならば、信仰がアメリカ化することは避けられないであろう。その点で、彼らが主張する福音主義も、どこかしらキリスト教とは元来関係のない要素が紛れ込んでいる可能性があり、また実際、『レフト・ビハインド』DVD 第三巻に見られるように、千年期前再臨説とアメリカ保守なるものが渾然となっているような例も見られる。しかしながら、元来キリスト教福音主義以外のものが紛れ込んでいるという点では、リベラル的と言われる神学も同様なのであって、特にその中で、自分こそが社会を浄化するのだと自負するものについては、アメリカ化した保守福音主義と同じ地平に立っているとも言えるわけであるから、俗に言われるファンダメンタルな立場（＜アメリカ＝メシア＞という構図に忠実なという意味での）⁴⁴⁾ をリベラルなそれに置き換えたとしても、メシア的役割を担う人物が交代するに過ぎず、従って結局は、＜我々こそが、社会の浄化の使命を担っているのだ＞という見方そのものを崩すことはできないだろう。実際、『アメリカの戦争と宗教』の中に見られる栗林輝夫の「やられたらやり返せ。泣き寝入りに終わらせない、そういう根性をもっているのが彼らマイ

ノリティの人々です」⁴⁵⁾ というような発言は、テロリストにアメリカはやられた、そのまま黙ってはいられない、テロリストに対して立ち上がり、この世界をテロリストの脅威から救おうとする〈アメリカ＝メシア〉といったスタンスと、考え方は基本的に同じであって、単に、誰が誰に対してやり返すのか（そしておそらく規模も、だが）違っているだけのことではないだろうか。

フランスの宗教社会学者セバスチャン・ファトは、*Dieu Bénisse L'Amérique* の中で、「一般に共有されている考え方とは反対に、グローバル化を続け、フランスのメディアが恐れているアメリカ的『セクト』に抗する最良の城壁はおそらく、いくつかある中でも、アメリカ合衆国に既に存在する諸宗教を弱めることではなくて、それら諸宗教の絶えず戦う姿勢なのだ」⁴⁶⁾ と述べている。ファトは、真の民主主義を護るという立場から、「一人の個人あるいは一つの団体が、民主主義における権力の空席を占有しようと試みようとすることがある。人類の野心を超えたところに位置している他者 (Autre) に目を向けることは、そのような企て全てから、民主主義の権利の座を護ることに貢献しないだろうか」⁴⁷⁾ というジャン・バイデルト (Jean Weydert) の言葉を引用しつつ、超越神への信仰こそが、〈アメリカ＝メシア〉の構図を打ち崩すと主張している。

ファトは、〈超越神〉と言う際に、キリスト教の神のみを指しているわけではないが、アメリカ保守派層の要に福音主義に立つと自負するキリスト者がおり、彼らが仮に、本来の福音主義とそれとはもともと異質なアメリカ保守なるものとの境界線の区別がつかない状態にあるとするならば、後者から前者を引き離すものは、真の福音主義信仰、あるいは、そこへ至ろうとする試みであるとは言えまいか⁴⁸⁾。

2001年9月11日以降のアメリカ合衆国の、対イラク戦争への動きは、キリスト教ファンダメンタリストたちによる働きかけが強かったとしばしば言われる。しかしながら、彼らの代表格ともいえるジェリー・ファルウェルとパット・ロバートソンが9.11直後に主張したのは、「神は『アメリカの敵』にアメリ

カを攻撃することを許された、なぜなら、『40,000,000 人もの罪なき赤子』を殺すことにより（ここでファルウェルは中絶のことを言っているのだが）、アメリカ人は『神の怒りを買ったのだ』（*we make God mad*）⁴⁹⁾ という、アメリカ自ら悔い改めを促すものだったのだ。

ファルウェルとロバートソンの主張の根底には、旧約聖書イザヤ書の、神に立ち帰ろうとしないイスラエルの民を罰するために、神がイスラエルの敵国アッシリアを用いたという記述があるものと思われる。アメリカ合衆国は今日、繁栄を謳歌しているが、家庭は崩壊し、中絶件数は高いままである。街には犯罪が横行し、麻薬やアルコールに溺れる人も少なくない。このようなアメリカ社会の退廃ぶりに目を瞑りながら、あたかも自分たちは善であるかのように振舞うアメリカ人に、今一度神へと目を向けさせ、罪の悔い改めを促すために、神はアメリカの敵をして合衆国を攻撃せしめたのだというわけである。ここには、全知全能の神の前に立つ、謙虚な姿があるとは言えまいか。9.11 直後、「自分たちは正しいのであり、神は常に自分たちの側に立っておられるということは自明の理」⁵⁰⁾ であると考えたブッシュ政権やアメリカ世論の中で、それに異を唱えた者の中に、聖書根本主義に立つキリスト教ファンダメンタリストたち（聖書の教えに忠実なという意味での）がいた。その事実は、現在のアメリカ的なるものにくるまれたキリスト教からの脱却を可能にするのは、＜聖書のみ＞の原則に基く真の福音主義であるという主張の一つの、しかし力強い根拠になりはしないだろうか。

『レフト・ビハインド』は、＜至福千年をもたらすのはキリストのみ＞という基本線を買っていると同時に、＜特殊な使命を帯びたアメリカ＞という輝きもまた持っており、その点で同作品は、極めてアメリカ的なる物語である。イエス・キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」⁵¹⁾ と語った。『レフト・ビハインド』を支持するアメリカのキリスト者たちが、このようなイエス・キリ

ストを証する聖書に忠実であるという意味でのファンダメンタリストとして立ち、神の前にへりくだった存在でいられるか否か。それは、チャック・スミスの次の言葉を、どこまで自らのものとしてできるかどうかにかかっているのではないだろうか。

政治家が何と言おうと、この世を贖える人は存在しません。四年ごとに繰り上げられるアメリカ大統領選挙の際には、「私に投票すれば、世界を不健全な状態から救い出してみせる」といった公約が謳われます。たとえ大統領として最も適切な人が選ばれたとしても、一国を贖える人はいません。ましてや全世界を贖える人は主イエス・キリスト以外、いないのです⁵²⁾。

注

- 1) <http://www.leftbehind.com/> (2008年9月17日現在) による。16巻の中には、携挙以前の出来事をまとめた三部作も含まれている。
- 2) 森孝一『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』pp.56 - 57。
- 3) 同、および森孝一『宗教から読むアメリカ』pp.171 ll.11 - 13。
- 4) 森孝一『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』p.76 ll.4 - 1.5。
- 5) 『レフト・ビハインド』公式サイト (<http://www.leftbehind.com/>) には政治的立場を問うセクションがあり、それによれば、回答者 5,623 人の内訳は、保守派 62%、穏健派 16%、リベラル派 9%、政治に無関心と回答したもの 13% となっている (2008年9月17日現在)。作品を批判するために同サイトにアクセスする者もいるであろうし、同統計は必ずしも科学的なものではないと断り書きまでついているが、この数値は、『レフト・ビハインド』が小説にせよそれ以外の作品にせよ、保守派層へのアピール力を持っていることの一つの裏付となろう。
- 6) 千年期前再臨説の他にも、千年期後再臨説、無千年期再臨説があり、更に、千年期前再臨説には、古典的なものとデイスペンセンセーション系のものとに分けられるとい

うように、終末に関して一致した意見はキリスト者の間には見られていない（セバスチャン・ファト（Sébastien Fath）*Les Protestants*.（『プロテスタントたち』）p.71 から p.72 までの表を参照）。また、携挙については、正しい教義というものがない（チャック・スミス『黙示録の封印を解く』p.32 l.2）ため、これこそが千年期前再臨説だと断定できる唯一の筋書きは現在のところない。それでも、神学的枠組みの中での千年期前再臨説の諸説と、神学を超えて、世俗の思惑を吸収しつつ立ち現れてきたものとの区別をつけることは可能であると思われる。

- 7) N・コーン『千年王国の追求』p.10 下 l.19 - p.11 上 l.1。
- 8) 同 p.11 上 l.8 - l.10。
- 9) 同 p.20 下 ll.12 - 13。
- 10) 同 p.31 上 ll.4 - 5。
- 11) 同 p.189 下 ll.11 - 13。
- 12) 例えば N・コーン『千年王国の追求』p.79 下 l.18 - l.19。
- 13) 同 pp.101 - 102。
- 14) 同 p.157 上 ll.4 - 5。
- 15) 同 p.181 上 l.4。
- 16) 同 p.203 下 ll.3 - 4。
- 17) Fath, Sébastien (2004) *Dieu Bénisse L'Amérique* . Chapitres 8 et 9。
- 18) N・コーン『千年王国の追求』p.67、p.102。
- 19) 同 p.115。
- 20) 同 p.191。
- 21) 同 p.222。
- 22) 同 p.203 上 ll.18 - 20。
- 23) 同 p.203 下 ll.2 - 4。
- 24) 同 pp.204 - 211。
- 25) 同 pp.215 - 227。

26) 同 pp.227 - 229。

27) 同 pp.234 - 242。

28) 同 pp.242 - 243。

29) 同 pp.243 - 261。

30) 同 pp.262 - 292。

31) N・コーンは一歩進んで、教理としては正統派のキリスト教とはかけ離れたものであるにも拘わらず、20世紀前半ドイツで見られたナチズムと大衆化した千年期前再臨説の間の類似を、フィオレのヨアキムによる聖書釈義を紹介しながら指摘している。

ヨアキムは、「歴史を三つの連続的時代の上昇過程として捉え」（N・コーン『千年王国の追求』p.104 下 ll.8 - 9）ていたが、その考え方は、「神学的段階から形而上学的段階を通して科学的段階へ上昇するというオーギュスト・コントの歴史観」（同 p.105 下 ll.6 - 7）の中に、また、「原始共産主義、階級社会、そしてついには自由の世界になって国家が消滅する最後の共産主義、という歴史の三段階を説くマルクス主義的弁証法」（同 p.105 下 ll.8 - 10）、更には、「一千年存続するとされるあの〈新秩序〉の名称に採用された〈第三帝国〉という言葉」（同 p.105 下 ll.13 - 14）の中に影響が見られるとコーンは指摘している。

ナチスドイツのもとでは、〈覇者〉がユダヤ人であり、〈真の王者〉がゲルマン民族であって、ユダヤ人のせいで、ゲルマン民族のかつての黄金時代は失われてしまった。そこで、今こそゲルマン民族は立ち上がり、〈覇者〉ユダヤ人に打ち勝たなければならない、そうすればそこに至福の時が舞い戻り、それは千年続くだろう、という図式として、古き終末論が立ち現われたのである（N・コーン『ユダヤ人世界征服陰謀の神話』pp.213 - 232）。ただし、ヒトラーにとっての〈自然状態＝黄金時代〉とは、不平等、位階化、劣者の勇者への服従が実現されていることで、それを平等主義、つまりボルシェヴィキ的試みへと促さんと企んでいるのがユダヤ人だと彼は考えていた（同 p.220 ll.1 - 3）。

32) N・コーン『千年王国の追求』p.104 下 ll.8 - 9。ヨアキムについては、上記注 30) も参照のこと。

- 33) アラブ社会への階級闘争の考え方の影響は、池内恵『現代アラブの社会思想』を参照。
- 34) ジャン・ポール・ヴィレーム『宗教社会学入門』p.94 l.14 - p.95 l.2。カッコ内挿入は訳者林伸一郎による。
- 35) 古屋安雄『キリスト教国アメリカ再訪』p.145 l.9。
- 36) N・コーン『千年王国の追求』p.284 下 l.21 - p.285 上 l.1。
- 37) 同 p.278 下 ll.14 - 17。
- 38) 『聖書』ローマの信徒への手紙第3章 10節。
- 39) 同。
- 40) N・コーン『千年王国の追求』p.221 下 ll.10 - 13)。
- 41) 関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『アメリカの戦争と宗教』p.156。
- 42) チャック・スミス『黙示録の封印を解く』p.144 ll.12 - 13。
- 43) 同 p.151 l.7。
- 44) 森孝一は、『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』の中で、原理主義（者）を「自分たちは真理を知っている。その真理は単純であり、聖書やクルアーン（コーラン）などの正典やグル（尊師）の言葉の中に明白に示されているとし、それを実際の政治や政策の上に実現しようとする考え方（者たち）」（同著 p.61 ll.12 - 14）と定義している。森はここで、アメリカ原理主義を宗教右派の思想と同義に理解しているが、原理主義（ファンダメンタリズム）の定義は容易ではない。キリスト教においては、もともと、キリスト教のエッセンシャルな（すなわちファンダメンタルな）部分を堅く保とうとした立場の人々を指して、ファンダメンタリストと呼んだ。すなわち、「『ファンダメンタリズム』という名称は、一九一〇年から一九一五年にかけて出版された十二冊のパンフレット『ファンダメンタルズ』(*The Fundamentals*) に由来する」（森孝一『宗教から読むアメリカ』p.190 ll.1 - 2）のである。各宗教によって原理主義の意味合いが異なることを簡潔にまとめたものとして、ジャン・ポール・ヴィレーム『宗教社会学入門』p.86 l.1 - p.95 l.2、キリスト教内におけるファンダメンタリズムの多義性についての試論は、セバスチャン・ファト (Sébastien Fath) *Militants de la Bible aux États-Unis. Évangéliques*

et fundamentalistes du Sud (『アメリカ合衆国における聖書の戦士たち—南部の福音主義者とファンダメンタリスト』) p.154 l.3 - p.160 l.11 を参照。

- 45) 関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『アメリカの戦争と宗教』p.45 ll.8 - 10。
- 46) Fath, Sébastien (2004) *Dieu Bénisse L'Amérique* . p.245 ll.16 - 21。
- 47) 同 p.245 ll.27 - 30。
- 48) アメリカのファンダメンタリストたちの全てが<アメリカ=メシア>という構図に魅せられているわけではない。実際、『レフト・ビハインド』公式サイトにおいてさえ、そのような見解は述べられておらず、終わりの時のアメリカについては、次の四つの可能性があるとしている。①終わりの時には、アメリカ合衆国はもはや強国ではなくなっている、②終わりの時までにはアメリカ合衆国は他国によって滅ぼされている、③終わりの時までには、アメリカ合衆国は内部の墮落によってその力を失っている、④携挙によりアメリカ国民の多く(彼らはアメリカの地の塩である)が天に上げられるため、その後の大患難時には、アメリカ合衆国は中心的な役割を演じられない。いずれも悲観的な見方であって、<アメリカ=メシア>という輝かしい響きは聞こえてこない。このことから、また原作との隔たりがあるという点で、『レフト・ビハインド』DVD 第三巻の特異性が際立っていることがわかる。ただし、このことは、原作『レフト・ビハインド』が純然たる千年期前再臨説のみに基づいて執筆されていることを意味しない。小説『レフト・ビハインド』シリーズ第一巻に見られるアメリカ的なるものについての指摘は、加藤知子(2008)『『レフト・ビハインド』に見られる反キリスト像についての覚書』を参照。
- 49) Fath, Sébastien (2004) *Dieu Bénisse L'Amérique* .p.162 ll.23 - 26。なお、ロバートソンは、ファルウェルに同調したため、キリスト者連合総裁を辞任することになった(森孝一『「ジョージ・ブッシュ」の頭の中身』p.120)。
- 50) 森孝一『「ジョージ・ブッシュ」の頭の中身』p.123 ll.8 - 9。
- 51) 『聖書』ヨハネによる福音書第14章6節。
- 52) チャック・スミス『黙示録の封印を解く』p.46 ll.14 - 17。

参考文献

- Cohn, Norman (1961) *The Pursuit of the Millennium*. [ノーマン・コーン『千年王国の追求』
江河徹訳、紀伊国屋書店、1978年]
- Cohn, Norman (1967) *Warrant for Genocide*. [ノーマン・コーン『ユダヤ人世界征服陰謀の神話』内田樹訳、KKダイナミックセラーズ、1986年]
- Fath, Sébastien (2003) *Les Protestants*. Paris : Le Cavalier Bleu.
- Fath, Sébastien (2004) *Militants de la Bible aux États-Unis. Évangéliques et fondamentalistes du Sud*. Pars : Autrement.
- Fath, Sébastien (2004) *Dieu Bénisse L'Amérique - La religion de la Maison-Blanche*. Pars : Seuil.
- 古屋安雄 (2005) 『キリスト教国アメリカ再訪』新教出版社。
- 池内恵 (2002) 『現代アラブの社会思想』講談社現代新書。
- 加藤知子 (2008) 『「レフト・ピハインド」に見られる反キリスト像についての覚書』『星城大学人文研究論叢第4号』
- 関西学院大学キリスト教と文化研究センター編 (2004) 『アメリカの戦争と宗教』新教出版社。
- LaHaye, T and J.B. Jenkins (1996) *Tribulation Force*. Tyndale House Publishers, Inc.[ティム・ラヘイ、ジェリー・ジェンキンズ『トリビュレーション・フォース』松本和子訳、いのちのことば社フォレストブックス、2002年]
- LaHaye, T and J.B. Jenkins (1996) *Nicolae*. Tyndale House Publishers, Inc.[ティム・ラヘイ、ジェリー・ジェンキンズ『ニコライ』松本和子訳、いのちのことば社フォレストブックス、2003年]
- 宮平望 (2004) 『現代アメリカ神学思想』新教出版社。
- 森孝一 (1996) 『宗教から読む「アメリカ」』講談社選書メチエ。
- 森孝一 (2003) 『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』講談社文庫。
- 日本聖書協会 (1990) 『聖書』新共同訳。

Smith, Chuck and David Wimbish (1994) *Dateline Earth*. [チャック・スミス『黙示録の封印を解く』平野耕一監訳、プリズム社、1994年]

Willaime, Jean-Paul (2005) *Sociologie des Religions*. Paris : Presses Universitaires de France. [ジャン・ポール・ヴィレーム『宗教社会学入門』林伸一郎訳、白水社【文庫クセジュ】、2007年]

DVD

Left Behind — World at War 『人間消失 ファイナル・ウォー』(株)ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント。

インターネットサイト

『レフト・ビハインド』公式サイト (<http://www.leftbehind.com/>)。